

## 275 号

## 6 月例会のお知らせ

日 時 : 6 月 24 日 (土) 19:30~21:30  
場 所 : 府中町屋倶楽部  
内 容 : 講演 「ポルトガル人宣教師が聞いた福井弁」  
講師 井上清一氏 (福井の語り部)  
(システム工学、ロボット工学研究者)

450 年程前、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、日本滞在中に二度越前の国を訪れています。「越前の国は、都から 40 里近く離れたところであって、日本におけるもっとも高貴な主要な国の一つであり、五畿内よりも洗練された言語が完全な形で保たれていた。」  
(『完訳フロイス日本史 3』・中公文庫)

■6 月 5 日が二十四節気では「芒種」でした。今は田植え時期が早くなっていますが、「芒種」は、イネやムギなどの「芒(ノギ)」のある穀物、すなわち稲を植え付ける季節を意味します。つまり梅雨入り前の田植えの開始期に当たります。春夏秋冬を七十二に分けた七十二候では、今の季節は「腐草(ふそう) 螢と為る」です。昔の人は腐った草が螢になると信じていたような。つまりこれからしばらくの間が、螢の飛び交う頃となります。あちこちで、もうかわいいイタルブクロは咲き始めています。

■先月は湖南三山めぐりを楽しみましたが、今月は今まであまり聞いたことのない話をしてもらいますので、会員でなくても興味のある方を誘っていただいで結構です。

■ルイス・フロイスはポルトガル人で、イエズス会に入会したのは、16 歳の時です。その後フランシスコ・ザビエルから日本事情を聞き、日本での伝道の志を抱いて 1562 (永禄 5) 年に神父として日本に赴任して来ました。彼はイエズス会の文書記録を担当していたらしく日本宣教の詳細な報告書を書いているのみならず、織田信長や豊臣秀吉の時代の日本の思想、宗教、文化、生活風俗などを克明に描いています。

それにしても、そのフロイスの『日本史』に上記のような記述があったのは驚きです。わたしたちは福井弁が、イントネーションは韓国風だし、かなり田舎臭い言葉だと思っておりましたのに、「五畿内よりも洗練された言語が完全な形で保たれていた。」と、450 年も前の外国人に越前の国やその言葉が、こんなにも褒められていたとは。『日葡辞書』の中の福井弁の話しが楽しみです。

イエズス会は、フランシスコ・ザビエルが創設したもので、世界各地への宣教活動を重視し、優秀な宣教師を派遣すると同時に、宣教の為の言葉の習得に力を入れたようです。

『日葡辞書』は、1603 年(慶長 8 年)日本布教のための、ポルトガル語で説明を付けた日本の言語の辞典です。説教は話し言葉でなければなりませんから、特に話し言葉に重きをおいていたようです。室町時代から安土桃山時代における中世の日本語約 3 万 2 千語が収録されています。イエズス会は、ヨーロッパから印刷機まで持ち込んだと言いますから、宗教布教のエネルギーのすごさを感じます。尚、日本では遣隋使の時代から明治まで外国名を漢字表記していましたので、ポルトガルは「葡萄牙」です。